

# 『世界』のヒーローアカ デミア

ハルキゲニア

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

三十路手前の残念な青年、芦田謙治（賢者一歩手前）。彼は不幸にも死んでしまう。

だが、彼の人生はそこで終わりではなかった！

大好きだったジョジョの奇妙な冒険、そこに登場する時を止めるスタンド、ザ・ワールドと共に、超常が日常となった世界で彼はカッコいいヒーローを目指す！

# 目次

N o. 1 0	自由	63
N o. 9	序章	55
N o. 8	親友	48
N o. 7	憧憬	40
N o. 6	英雄	30
N o. 5	運命	23
N o. 4	進歩	16
第二部 世界潮流		
N o. 3	目標	11
N o. 2	確認	6
N o. 1	原点	1
第一部 ファントム・オブ・ザ・ワールド		

戦	N o. 1 6	vs B チ ーム その 2	111
健	N o. 1 5	vs B チ ーム その 1	102
	N o. 1 4	仲間	94
	N o. 1 3	訓練	85
	N o. 1 2	渾名	75
	N o. 1 1	素質	70



## 第一部 フアントム・オブ・ザ・ワールド

## No. 1 原点

「ああ〜疲れた〜」

雪の降る午後11時、世間はクリスマスだなんだとお祭り騒ぎ。対して俺は28年間彼女無し、いつもの残業で腰痛頭痛に肩こり疲労。何でこんなことになってしまったのか。今世紀最大の謎である。

冗談はさておき、やけに駅が遠いんだよなあ、この会社。今日こそは終電にのって見せる！

「あのクソハゲが、上司だからって調子乗んな！」

小声でストレス発散も忘れない。最近、何かと運がない。この前だつてジョジョの漫画が売り切れだったし、アニメの録画もうっかり忘れていた。クソツ。吉良の最後はどうなったんだ…！気になって夜しか眠れない！

あゝあ。俺にもスタンドが使えたらなあ。少なくとも一日一回あのハゲを殴るね、俺は。

—— パッパーーー!!

「へ?」

クラクシヨンと共にトラックのヘッドライトが俺を照らす。ああ、そういえば俺、最近運がないんだった。目の前のトラックがゆっくりと近づいてくる。走馬灯と言うやつだろうか。今までの人生が頭に浮かぶ。何てつまらない人生だっただろう。ろくに親孝行も出来ずに先立つ不幸をお許しください。

死にたくない。スタンドの矢に当たるまで、俺は死ねん! 駄目だ。考えが纏まらない。そんなことを考えてるうちに、トラックは俺を吹き飛ばす。痛みすら感じない。首から先がない俺の体が見える。

… 呆気ない死だった。



—— 起きよ、矮小な者よ。

「.:.: う.:.: ううん」

何だ？

俺は死んだはず…

——そなたは選ばれた。

——その傲慢な望みは、確かにこの耳に届いた。

「誰…だ？」

——故に、そなたを悠久の輪廻から外し、そなたの望む力を与えよう。そなたの望む世界を与えよう。

——我を楽しませよ。矮小な者よ。

「は？…え？何が、どうなつて？…え？」

——そなたが我を飽きさせないことを願つておるぞ。

体が…光に!? つか誰だよあんた！意味がわからん…！

「お、おい！説明し——」

声が出せない。視界が完全に光に覆われた。なのに眩しいと思わない。自分の体が消えていくのがわかる。此処が何処だとか、俺はどうなつてしまうんだとか、聞きたいことがありすぎて、逆に何も聞けなかった。ただ…

——そなたが栄光を掴むのか、それとも汚泥を舐めるのか、とくと見せてもらおう。  
その言葉が、俺の耳に引っ付いて離れなかった。



時は20xx年。中国で光る赤子が生まれたと話題になった。それから次々と不思議な力を持った人間が現れる。その不思議な力はいつしか『個性』と呼ばれ、世界は人口の約八割が個性を持った超常社会へとなっていくた。

そんな中、人々はある職業へと憧れを抱くようになる

その職業こそ、『ヒーロー』！

超常は日常に！

理想は現実に！

個性を悪用する『敵』に立ち向かい、世界の平和を守る『ヒーロー』が、今もつとも注目されている職業なのだ！

テレビから聞こえてくる音に、俺は本当に別世界に来てしまったのだと理解する。



「あら？ねえアナタ、この子だったらもうヒーローに興味があるみたいよ！」

「なんだって!？」

「キャツキャツ」

「ほらほら、テレビのCMを見て喜んでるわ！」

「そうか〜！もしかしたらこの子は将来、大物ヒーローになるかもな！」

父さん、母さん。勝手に死んでゴメン。でも俺は今、新しい家族の下で幸せに暮らしています！

芦田 謙治改め、神田 定時 より

P S , 赤ちゃんプレイ、最高かよ…！

## No. 2 確認

さて、俺が新しい世界に生まれ落ちてもう二ヶ月がたった。

前世、と言つて良いのか分からんが、とにかく前世で聞いたことだが、赤ちゃんの頃は驚きの連続で時間が過ぎるのがあつという間だそうだ。精神年齢28歳の俺をもつてしても、この摂理には抗えないらしい。

いやね？ ほら、俺つてばいつまでも少年の頃の気持ちをおぼれない男だからさあ？

おいそこ！ 息子さんも少年のようですわねって言うな！

「あらく、お漏らししちゃったの？すぐ変えますからね」

「あうあ！」

ありがとうママ！ 愛してるぜ！

ゴホンゴホン、話を戻そう。本来大人な精神をした俺が、なぜ毎日があつという間なのか。訳を話そうじゃないか。どうやら俺、個性に目覚めてしまったらしい。

今、俺の目の前で静かにたたずむ金色の武装のようなものを体中に着けた大男こそ、俺の個性！

そう、とんでもないパワーと、圧倒的な能力を持ったスタンド、『ザ・ワールド世界』!!

俺の心の声に答えるようにジョジョ立ちを決めるザ・ワールド。すごい肉体美だ。ボディビルダーが自分の筋肉を恥じて一周回ってデブになってしまいうぐらい美しい。

話が変わるが俺は、ジョジョの中でも特に好きなキャラクターが3人いる。説明しよう！

常に冷静沈着！　だがその内に秘めるのは火傷しそうな激熱ハート！　圧倒的パ

ワーでねじ伏せろ！

空条　承太郎!!

口から出るのはまず皮肉！　ワガママでちよっぴりお茶目なところも魅力的！　誇

り高き漫画家！

岸辺　露伴!!

そして……生まれながらの悪！　恐怖すら抱くカリスマと、目が離せないその色気！

一生ついていきます！

ディオ・ブランドー!!

と言うわけだ。おれはこの3人が大好きだ。ホモって言うな！

そしてもちろん、それぞれが持つスタンドも好きだ。

俺に発現した個性、ザ・ワールドは3人の内、ディオ、正確に言えばDIOが持っていたスタンド。このスタンドを一言で表すなら、全てをぶつちぎりで超越したスタンドだ。ジョジョ最強のスタンドと目されるスター・プラチナに競り合うパワーと、時間停止と言うシンプルかつ超強力な能力！ たまんねえな、おい！

このスタンドが初めて発現した時は、そりやあもう驚いたね。今でもテンションの昂りが戻らない。時々興奮のあまりギャン泣きしてしまうぐらいに、俺は嬉しい！  
ヒヤツホウ！

ところで、ジョジョのあるキャラクター、ジャン・ピエール・ポルナレフが持つスタンド、『銀の戦車』シルバー・チャリオッツは、ポルナレフが子供のころに発現した時は幼い姿だったはずだが、何で赤ちゃんが発現したのザ・ワールドが大人の姿なんだ？DIOは大人だったからまだしも、今の俺は子供どころじゃないはず。

もしかしてだが、俺の精神が大人だからか？

スタンドの強さは精神の強さ。俺の大人な、オ・ト・ナな精神がザ・ワールドを今の姿にしているのかもしれない。大人だからなあ、俺！

「あらあら、今度はおつきい方出ちゃったの？ もう一度オムツ変えましょうね」

「あう！ あいあい！」

フツ

どうやら俺のお腹はユルユルらしい。

ママンがオムツを変えてくれていた間に、俺はザ・ワールドの能力をもう一度試す。以前試した時は、時が止まった時間が一瞬だったのでよくわからないまま疲れて寝てしまったのだ。だが、確かにあの時、全てが静止して見えた。

いくぞ！ザ・ワールド！

ブウーーン！

と、心の中で格好いい効果音を出す。あの音良いよね。

さて、能力を使うように命令したんだけど、今日もよく分からなかった。なんとなく「あ、止まってる？」とは思うんだけど…

めっちゃ疲れるし。D I Oは首の傷が治るにつれて停止時間が長くなっていったが、俺はどうなんだろう。

… 分からん。だが、俺は諦めんぞ！ 必ず9秒の間、時を止めて見せる！

将来の夢は、「貴様見ているな！」と言うことです！

「ただいま〜」

玄関の方から、扉を開ける音と疲れたような声が聞こえる。パパンが帰ってきたらしい。

「お帰りなさい。どうだった？」

「上手く行きそうだよ。これも、君の愛情こもったお弁当のお蔭かな！」

「も〜！ アナタったら！ 誉めても猫の手しか出ないわよ！」

相も変わらずのイチヤイチャつぶりだ。俺もいつか幸せな家庭を築きたいもんだ。

俺を優しく育ててくれるママ、神田かんだ 曉美あけみさん。個性は『猫の手』。右肩甲骨辺りから白い毛の猫の手が生える。メキヨメキヨといって生えてくる猫の手は軽くホラーだ。髪の毛も白く、儂げ美人！

そして、たまにしか会えないパパン、神田かんだ 孝之たかゆきさん。個性は『高速思考』らしい。会話から聞き取れたが、実際には見ていない。この個性をいかして、若くして部長まで上り詰めた有能リーマン。羨ましいいぜ、親父！普通だ。これしか言うことがない。

最後に、この俺、神田かんだ 定時さだとき。恐らくこの世界でかなり強力な個性を持った男！ “さだとき”だからな！ “ていじ”じゃねえから！ 確かに前世では定時で帰ってきたけど！ 社畜って言うな！

## No. 3 目標

『ハツハツハ！ もう大丈夫！ 何故って？ 私が来た！』

平和の象徴、オールマイト。名前や個性、その他諸々が一切不明のナンバーワンヒーローだ。彼を指してヒーローになる人は多いらしい。

今まで彼の戦闘を記録した映像を見てきたが、パワー、スピード共にあちらが圧倒的に上だ。何だよ天候を変えるパンチって。物理的ウエザー・リポートじゃねえか。

はく、やっぱオールマイトは格好いいなあ。ヴィランはどうも暴れたいだけと言うか、そう！ 信念が感じられないんだ。けど、それは他のヒーローや、それこそ俺にも当てはまる。

前世から、俺と言う生き物は常に無気力だ。あれが欲しい！ だとか、これがしたい！ なんてジョジョのスタンドに対してしか思ったことは無い。他人からもよく言われたよ。「お前は何がしたいんだ」って。あのハゲ（※1話参照）にこの言葉を言われたときは悔しかった。

ああ、今となってはどうでも良いことなのに、なぜこんなにもあのバーコードが懐か

しく感じられるのか。いや、あれはバーコードを通り越して消えかけの横断歩道か。

駄目だな、今の俺。ようやくテンションが元通りになってきたと思えば、今度は一気に急下降だ。そもそもこの世界、何でジョジョが無いんだよ！　と言うより漫画そのものが少ない。

何故か、俺の天才的な頭脳とある仮説を立ててみた。ヒーローだ。それも、オールマイト等のヒーローが、漫画をつまらなくさせているのだ。そりやそうだろう。止まってるモノクロの絵を見るよりも、実際の戦闘を見た方が盛り上がる。

これが超常社会の欠点。フィクションがつまらねえ！　だって日常的に超常を目にしているのだ。飽きも来る。

フムフム。今日はちょうどヒーロー特集とか言う番組があったので、情報収集も兼ねての個性の確認をしている。見る限り、結構通用しそうだと言うのが俺の結論だが、プロには経験と言うものがある。ザ・ワールドを使いこなせていない今の俺では、一対一で戦った場合、十中八九敗北してしまうだろう。通用しそうだと言ったのは、俺がザ・ワールドを十分に扱えるようになったらの話だ。

「あう〜」

さ、今日もザ・ワールドの操作練習と洒落混みますか！



## 【数分後】

「あら？寝ちやったの？…ウフフ、かわいい寝顔。どんな夢を見てるのかしら？」

「ヒーローの夢を見てるんじゃない？」

「そうかもしれないわね。この子、ヒーローが大好きだもの。今日もおとなしくテレビをじっと見てたの」

「ああ、お利口さんなのさ。流石は僕らの息子だ」

「子育ては大変って聞いていたけれど、この子が特別おとなしいのかしら？」

「そうかもしれないね」



いつの間にか寝ていたらしい。

早く成長してくれないか、マイボデイよ。

ごめんよ、ザ・ワールド。俺が不甲斐ないばかりに、お前を退屈させてしまう。

そう心の中で謝ると、俺の意思がわかるのか、ザ・ワールドはそつと頭を撫でてくれた。

お、お前……！ 意思があるのか!?

…… そういえば、スタンドは意思を持つものも多くなる。ホワイト・スネイクがいい例だ。もしかしたら、原作のザ・ワールドにも意思があったのかもしれない。

ところで、近くでザ・ワールドを見てて思ったことがある。ザ・ワールドつてイケメンじゃね？

冷酷な感じの見た目をしているが、うん、やはりイケメンだ。

お前に出会えて良かった。お腹ユルユル、頭もユルユルな俺に、お前はついてきてくれるのか？

教えてくれ、ザ・ワールド。お前のその固く閉じられた口じゃ、俺にはわからない。お前は、俺の事、どう思ってるんだ？

DIOの方が良かったかな。俺がお前を望んだばかりに、お前が嫌な思いをしているなら、俺は……

俺は——

その時、ザ・ワールドは首を横に振った。多分、それ以上何も言うな。って言ってるんだろう。ハハ、優しいんだな。

そつと、割れ物でも扱うように、またザ・ワールドが俺の頭を撫でた。優しい、どこまでも優しい手だった。

ずっと思っていたんだ。俺が死んだとき、俺の前に現れたあの存在が俺に与えたこのスタンドは、退屈してるんじゃないかって、アヌビス神より切れる剣みたいだなDIOの方が、お前は好きなんじゃないか？ 俺じゃあ、お前の持ち主として不適切なんじゃ。でも、違った。ザ・ワールドは、俺の目を見て、俺に触れて、俺を認めてくれた。俺、頑張るよ！お前にふさわしい男になれるように！

この日、俺にはじめて目標ができた。窓から顔を覗かせる月が、俺を祝福してくれた気がした。

## 第二部 世界潮流

### No. 4 進歩

ザ・ワールドにふさわしい男になると決意したはいいものの、具体的に何をするかがまだ決まらない。ザ・ワールドが発現してから、ほぼ毎日時を止めてはいるが、止まった時間が延びた気配が一切無い。

D I Oのような才能が無いのだろう。一年とたたずに9秒も時を止めたD I O様を尊敬します。

これからは、先輩のD I Oを様付けでよぼう。そうしよう。

「うー、うえうー！」

「あらあら、どうしたの？どこか痛い？」

大丈夫だよ、ママ。安心して！ ちよつと自分の才能の無さに苛ついただけさ！でも、きつと誇れる息子になって見せるから！

0歳で親孝行を約束する俺の偉さよ。誉めてくれてもいいんだぜ？



ふいっ。今日も時間を止めては見たものの、やはり成長していない。だんだん不安になつてきた。

駄目だ駄目だ！ ポジティブシンキングだ。D I O様はこんなところで立ち止まつたりしない。俺が立ち止まるわけにはいかない。

何か・・・何か無いのか？ 俺の成長したところは・・・ハッ！

そうだ！ 俺、以前と比べてそこまで疲れていない！これはれっきとした進歩だ！進歩に違いない！進歩のはずだ！ 進歩だと思う！ 進歩・・・だよ・・・ね？ え、進歩じゃないの？

まずい。進歩がゲシユタルト崩壊して段々ち○ぽになつてきた・・・！

これ以上は危険だ！

ふう・・・

おふぎけもここまでにして、真面目に将来の事を考えよう。

まずは職業。これはヒーローで決まりだろう。折角のザ・ワールドなのに、使わなきゃ失礼つてもんだ。ヴィランの方がD I O様っぽいけど、それだとM r・物理的ウエ

ザー・リポートにプツチンされる。

次に鍛練方法だ。ジョジョ3部でエンヤ婆が、出来ると思えば出来る。大切なのはそう思える精神力だ。的確なことを言っていたのを覚えてる。つまりは修造論だ。諦めんよお！

これはなんとかかなりそうだが、問題は最後だ。ズバリ！ DIO様のロールプレイをするか否か。

え？ 下らない？ いやいやいや、そんな事ねえから。超重要よ、これ。

みんなも知っているととは思いますが、ジョジョには無数の名言がある。以前も言ったが（※2話参照）俺としては珍しいことに1つだけ目標と言うか、夢があつた。そう。

「貴様、見ているな？」

この台詞をいつかは言ってみたい。勿論かつこよく言うのだ。その為には普段からかつこいいキャラでなくてはいけない。もし普通の俺が言った場合、スベった後、俺の心に深く消えない傷が出来る。

そんなのは嫌だ！

と言うことで、DIO様のロールプレイをやってみただけで、出来る気がしない。

それに、俺自身を認めてくれたザ・ワールドに、DIO様の様に振る舞えば、失望されるかもしれん。

そつちの方が嫌だ！

悩む。

「うゝ」

「あら、またそんな声出して。今日は機嫌が悪いのかしら…。」

「ふゝむ…折角の休日だし、皆でお出掛けつてのはどうだい？」

「まあ！ それは良い考えだわ！ 流石アナタ、素敵よ！」

「えゝ、困つちやうなあ。アハハ。でも、君の方が素敵だよ！」

「もう！ 孝之さんったら！」

「アハハ」

「ウフフ」

… 誰か、コーヒーを持ってきてくれ。堪えられん。



はあ、二人のラブラブっぷりにはうんざりだ。未長くお幸せにしやがれ、こんちく

しよう！

久しぶりの外は、やっぱり見慣れなかった。厳つい角や、ケモミミ、カタツムリのよ  
うに伸びた目に、翼、どう見ても人間じゃ無いやつもいて、まるで異世界。まあ、俺の  
個性はスタンドだから、恐ろしい見た目にはならないだろう。

恐ろしいと言えば、DIO様は吸血鬼だ。なのに息子のジオルノは太陽とか大丈夫な  
んだよなあ。吸血鬼の特徴を引き継いでないんだ。吸血鬼って普通はそんなもんなの  
か？

……ん？

あ！ ま、まずい！ ボールを取りに公園から出てきた少年が、近づいてくる車に気  
付いていない！

このままでは前世の俺の最後みたいになってしまう！

「あううう……！」

うおおお……！

「ど、どうしたの？ さだくん、大丈夫!？」

「あ・あーうお！」

ザ・ワールド！

ブウーーーーン



一瞬、この世のすべてが静止する。

距離は5メートルと少し。止まった時間は0.1秒ほどだが、その程度、ザ・ワールドなら一瞬であの少年にたどり着く！

行けええ！ ザ・ワールド！

時が動き始めた。車のクラクションが鳴り響き、それに気付いた少年がとつさに体を庇おうとして、ザ・ワールドが少年を抱えて公園の方に飛び込んだ。

「うわああああ!!? . . . . . あれ？」

ふうふう. . . . .

なんとか間に合った。少年はまだ混乱している。そりやそうだ。他の子供たちや、見ていた保護者などが慌てて駆け寄り少年に怪我はないか聞いている。ちゃんと見とけよ。事故死した俺が言える立場じゃ無いけど。

「今、もしかしてさだくんが何かしたの？」

「ま、まさか！ この子はまだ0歳だよ？」

「え、ええ。そうよね！」

いや、俺がやりました。ま、分からないだろう。ダイジョブダイジョブ。

誰も気付いていないとは言え、人助けは気持ちの良いものだった。ザ・ワールドも心

なしか表情が明るい気がする。

うん、やつぱり俺、ヒーローになりたい。この個性なら、俺の手が届かなくてもザ・ワールドの手が届く。時を止めれば、危険な場所でも切り抜かれる。

ありがとう、名前も知らない少年よ！ 君のおかげで自分の進むべき道が見えた。

そうと決まればザ・ワールドの操作練習だ！

そう言えば、俺って今日ザ・ワールドを二回使った…？

そうだ、そうだよ！ 俺、ちん、あー違う違う。進歩できたよ！

## No. 5 運命

どうも。あの少年を助けてから、一切成長の兆しが見えない神田 定時です。

ニユースでその事が取り上げられてたけれど、すぐに他の話題に埋もれていった。

ちよつと悲しいぜ・・・

さて、俺は今幼稚園に通っている。前世の時の幼稚園の記憶などもうすっかり忘れてしまった。

幼稚園児って基本何してんの？ さっぱり分からんのだが・・・

俺の記憶のせいであつて今一つ他の園児と打ち解けられんのだ。ほら、俺って大人じゃな

「とりやー!」

「ぐほあ?」

何だ!?

後ろを見ると、髪がトゲトゲの男の子が俺に飛び蹴りをしていた。

「あゝ、ほらほら、喧嘩しないの!」

くっ! ここは先生の顔を立てて許してやろう。

「へっ! ギャーだな」

… このガキヤア！ 許さん！

先生に聞こえないように小声で言いやがった！

「かつちゃん、ざこつてなに？」

後ろの緑がかつた髪の毛、気弱そうな男の子が俺を蹴った推定かつちゃん君に聞いている。

「デク！ おまえそんなこともしらねえの？ ざこつてのはな、くそよわいやつのとなんだぜ！」

「へ、へ〜」

ははーん、この推定デク君はいじめられっ子の気質があるな？ そしてかつちゃん君、君は将来、典型的ないじめっ子になるね！

それはそれとして、君にはお仕置が必要だなあ？

食らうが良い！ ザ・ワールド・ヒザカツクン！

「うわああ！ な、なにが!？」

説明しよう！

ザ・ワールド・ヒザカツクンとは、ザ・ワールドの腕で敵の膝を後ろから強制的に力クン！ と押す技の事だ！

え？ しょうもないって？ フッフ、舐めてもらっちゃあ困るぜえ？

この技の真価は、パワー：Aのザ・ワールドが本気の時にこそ発揮される。そう！  
気付かれることなく、問答無用で敵の膝を砕くことが出来るのだ！ ネーミングセンス  
は気にするな！

「ど、どうしたの!?!」

「え？ あし…え？」

フハハハハ！ 混乱するがいい！

なに、流石に幼稚園児相手に本気は出さんさ。出したらただの糞野郎だ

「大丈夫？ 勝己君、具合でも悪いの？」

「え、あ、な、なんでもねえよ！」

フツ、所詮は奴も幼稚園児よ。



「おい、テメエ！」

何だ、また君か。勝己君

「なに？」

「すかしてんじゃねえ！」

あ？ 急に來て悪口とは大したもんだ。ぶつ飛ばしてやろうか？ オオン？

「おまえ、おれのてしたになれ！」

手下あ？ オイオイ勝己君、君はまだ自分の立場が分かっていないらしい。良いだろう。ここはDIO様のように華麗に言い聞かせるとしよう。

「ヤレヤレ、困ったものだ。いいかい？ きま」

「うるせえ！」

かああああ、このクソカスがあ！

人の話を最後まで聞け！

「やめようよ、かつちゃん」

「なくにへニヨへニヨしてんだ！ おれがきめたことはぜつたいなんだよ！」

幼稚園児の癖に、もう暴君みたいなこと言いやがって。しょうがない、もう一度ザ・ワールド・ヒザカツクンをするしか…

「フン！ きょうのところはこんぐらいにしてやる。おぼえとけよ！」

お？ ビビったか？

その言葉を最後に、彼は去っていった。しかし、三下みたいな捨て台詞だったな



それからと言うもの、妙に勝己君になつかれてしまった。

「よお。てしたになるきになつたか？」

「帰れ」

「な、なんだと!?!」

—— 次の日も

「おい、おまえ。なんてなまえなんだ？」

「教えない」

「なんでだよ!」

—— その次の日も

「おいさだとき! おれについてこい!」

「嫌だ」

「なんでだよ!」

お前こそ何で俺の名前知つてんだよ

—— そのまた次の日も

「おいさだとき、きようはどこに行く?」

「何で着いていく事前提なんだよ」

「ぜ、ぜんで…?」

「むずかしいことばしってるんだね! さだときくん!」

「フ、フン! とにかくついてこい!」

嫌だよ

——何時しか俺は、それを不快に思わなくなっていた。

「やつぱり、さだくんもヒーローになりたいの?」

「まあ、な」

「おれのほうがすごいヒーローになってやる!」

「ぼ、ぼくも! オールマイトみたいなカッコいいヒーローになるんだ!」

ほほう、出久君もオールマイトのファンか。俺もだぜ!

「なれるさ。きつとな」

「うん!」

フツ、子供というのも悪くはないな。いつだって純粋だ。その事が少し羨ましく思える。

だけどね、出久君。君、もう4歳だろ? こんなこと言うのもあれだが、個性、発現しないんじゃないか?

…なんて、言えるわけがない。きつと彼にも素晴らしい個性が発現するさ。そう信じ



よう。

が、数日後、彼は真つ白になって座っていた。恐らく、医者か誰かに諦めろとも言われたのだろう。

俺だって死んだ時に、偶然もらったようなもんだ。もしかしたら俺も、所謂『無個性』になつていたのかもしれない。その点で言えば、俺は運が良かったにすぎない。

……俺なりに、彼を励ますとしよう。

多分、この時からなんだろう。俺達3人の仲が崩れていったのは……

# No. 6 英雄

「こ、これ以上は、ぼぼぼ僕が許さないぞ！」

上ずった声、涙が零れそうな瞳を必死に目の前の3人に向ける少年、緑谷 出久。

それに対して、出久と向き合う3人はまるで、自分の立場を理解していない弱者に向けるような目をして嘲笑う。

手が爆発するビックリ人間爆豪 勝己と愉快な手下達2人。

そしてそれらを端から見ているクールなイケメン、俺。

「おい定時、テメエ今俺のこと馬鹿にしただろ！」

「まあまあ、落ち着け皆。喧嘩は良くない」

「無視してんじゃねえ！」

……勘の良いガキは嫌いだよ。

青い空、白い雲。なんて遊ぶにはピッタリの空模様なのに、何故男の子つてのは喧嘩が好きなのか。

「ツチ！ おいデク、お前さあ、立場わかってんのか？」

「ヒッ！」

「ヒヤヒヤヒヤ、やっちまおうぜ勝己！」

手がニヨキニヨキ伸びる少年がチンピラ発言を嘯まし、それを合図に自慢の翼を広げるポツチャリ君。

「いい加減にしろ、かつちゃん！」

と、止めに入るも、

「うるせえ！ 邪魔だ！」

そう言つて俺を爆破させようとしてくる。

……ああ、もう無理だ。こうなれば仲直りは望めない。

ここに、俺たち3人の仲には、消えない傷が出来てしまった。



「ハア……」

綺麗な空を見ていると、どうしてもあの頃を思い出す。出久とかつちゃんと俺の思い出を。

あの日、俺達3人は関わるべきじゃないと直感で理解してしまつたから。

幼稚園を卒業してからは、あの2人とは会っていない。小、中共に違ったからだ。2人は腐れ縁のように一緒だった。

そして俺は今、行くべき高校を決めあぐねていた。

候補としては、第一に雄英高校が来る。先生からも、「お前なら行ける！」と太鼓判を押されてはいるものの、ひとつ問題がある。

これは俺の予想だが、かつちゃんが入学する。

昔から強個性と持て囃され、それを扱える才能があつた彼は、自ずと一番が好きになつていった。勿論、高校も一番の雄英を選んでくるだろうし、入ってくるだろう。これは俺なりの彼への信頼の証しでもある。

だが、俺とかつちゃんは喧嘩別れのようなものをした。ぶっちゃけ気まずくなるだろう。俺が。

「……ハア」

またため息が溢れてしまう。親の期待、先生の期待、周囲の期待が、今だかつてこれほど重くのし掛かつてきたことはない。

やはり行くしかないだろう。ザ・ワールドを活かす為には、ヒーローになる必要がある。

「失礼します。3年2組の神田です」

「おお、神田か。決まったのか？」

決まったのか、とは、高校のことだろう。進路希望のプリントを提出していなかったのは俺だけだったからな。

「はい。待たせてしまってすみません」

「イヤイヤ、全然。優等生のお前には、いつも世話になってるしな！ それで、何処に  
したんだ？ やっぱり……」

「ええ。雄英にします」

そういったとたん、職員室から、おお！ と声が聞こえる。なんと言ってもこの中学  
初の雄英志望で、受かる可能性のある俺だ。教師達も嬉しいのだろう。

……ま！ 俺ってば優等生だし？

「おお！ 行つてくれるか！ やっぱりなあ。俺は嬉しいぞ！ 神田！」

先生はそう言つて俺の背中をバシバシ叩く。この先生にもお世話になった。必ずや、  
雄英に受かつて喜ばせよう。



雄英に行く決めてから、俺は人生で一番頑張った。寝る間も惜しんで、とはまさに

この事だろう。そのお陰か、俺は自分でもビックリするほど緊張していなかった。もう受かる気しかない。

準備は万端。両親に見送られながら、いざ行かん、試験会場へ！

会場についたは良いものの、広すぎい！

危うく迷子の仔猫ちゃんになるとこだった。既に筆記試験は終わったが、微妙であったと言っておこう。実は昔から勉強はあまり得意ではなくてね……

え？ 知ってる？ やかましいわ！

さて、これからは本番の実技試験！

説明会場の照明が消え、テンションアゲアゲのヒーロー、プレゼント・マイクが登場。俺も暇潰しに一度だけラジオを聞いたことがある。生でプレゼント・マイクの挨拶が聞けるとは思わなかった。

が、まあ、うん。会場はシーンとしてたけど、ね。仕方ない。

それにプレゼントマイクもそこまで気にしてなさそうだし、良いよね！

「……勿論、他の受験生の妨害等、アンチヒーローな行動は御法度だかん！」

でけえ声だなあ。

「二つよろしいでしょうか！」

おお、いかにも真面目そうなメガネ君が質問するらしい。

どうやらプレゼント・マイクから説明されていないが、プリントには記載されている4種類の仮装ヴィランのことらしい。

フツ、気付かなかったぜ……！ さてはあいつ、デキるツ！

「そいつあ0ポイントのお邪魔虫！ 謂わばゲームに出てくるギミックモンスターだ  
！」

ハハーン、そう言うことね！ おそらく並みの個性じゃ倒せん感じになってるんだろ  
う。見つけても放置が鉄板かな？

とか思ってたけど、さすがにこれはやりすぎじゃねえか!? 雄英高校さんよお！

ズゴゴゴゴゴゴゴゴ！

と、そこらのビルをペしやんにしながら愚鈍に進み続ける0ポイントヴィラン。会場の中に街があったことも驚きだが、こいつはそれを凌駕する。

今までコツコツ1、2、3ポイントヴィランを倒してきたが、「さっきまで遊んでましたか、何か？」と言わんばかりの破壊っぷりには、さしもの俺も呆然とするしかない。いやはや、こいつは逃げるしかねえなあ！

「誰か……助け……て……」

なんて、か細い声が聞こえるまでは、俺もそう思ってたさ。

これはプロヒーローの卵を決める試験。こんなとこでひよつて、何がヒーローかってんだ。笑わせる！

「ああ、今助けるぞー！」

すまん、ザ・ワールド。さっきまでの情けない俺は忘れてくれ。

ザ・ワールドと目が合う。その目がどこか、しょうがないといってる気がして、つい笑ってしまった。

先程のか細い声の主、どこかの女子生徒だろう。その子の足の上に、かなり大きめの瓦礫が乗っていた。

それをザ・ワールドは難なく吹き飛ばす。



「え？」

もう安心だ。何故って？ 俺が来た！

いつか見たテレビを思い出す。あのととき憧れたオールマイトは、見てくれているだろうか。確か雄英の教師になったはず、なんてどうでも良いことが頭に浮かぶ。

「あ、ありがとう……」

「気にするな」

0ポイントヴィランを見上げる。

でけえなあ！

行けるか？ ザ・ワールド。

いや、愚問だったな。

「行くぞー！」

ザ・ワールド！

ブウウウウウツ！

時を止め、足を同期させたザ・ワールドで俺ごと上空に飛び上がる。

フフフ。今の俺は既に5秒もの間、時を止めることが出来る！

ちやうど0ポイントヴィランの肩の上に着地したところで時が動き出す。

急に現れた俺に、機械の癖に驚いたような仕草をする0ポイントヴィラン。遅い！

行くぜツ！ ザ・ワールドオ！

「WRYYYYYYYYY！」

大声と言うものを久し振りに出した気がする。ザ・ワールドの本気の拳は、0ポイントヴィランの頭をひしゃげるに留まらず、そのままの勢いでぶっ飛ばした。

「貧弱！ 貧弱ウー！」

言ってやったぜえ！ D I O様の御言葉をなあああ！

あ、ヤバい。どうやって着地しよう！

うおおおおお！

フンツ！ と、地面にめり込みながら着地する。今、めっちゃ足痛いです。誰か！

ヘルプミー！

『終了ー！』

と、プレゼント・マイクの声がする。

中々、すごい一日だったぜ…！



## No. 7 憧憬

僕、緑谷 出久には、2人の親友がいる。いや、いた。と言うべきだろう。

そう、今はもう離ればなれになってしまった。

いつも僕の味方でいてくれた強くて優しい人。さだくんこと、神田 定時君だ。初めてさだくんと出会ったきっかけはもう一人の親友、かつちゃんが理由だった。

あの日も僕はかっこいいかつちゃんの後を追っかけてたと思う。そんな時、かつちゃんが僕に言った。

「デク！ きようはあのですかしたやつをぶつとばしにいくぞー！」

デクとは僕のことだ。そしてすかした奴って言うのはさだくんのこと。今思えば、あの出会いが僕たちの運命だったんじゃないだろうか。

かつちゃんがいきなりさだくんの背中を蹴った時は驚いた。でも、そのすぐ後にまるで効いてないみたいにゆらりと立ち上がったさだくんにも少し恐怖を抱いたのだ。何て言うか、そう。『スゴ味』があった！

多分、かつちゃんもそれを理解したんだろう。あの時は何時もより勢いが無かった。

これが、僕たち3人の出会い。

あれからはよく3人で遊んだ。いつしか友達も増え、家でオールマイトの動画を見ながら毎日楽しい時間を過ごしていた。

だけど、それは唐突に崩れ去った。病院で無個性と判断され、その噂が広まったからだ。いつも遊んでた友達がどこか馬鹿にするような目で見てくるようになった。

でも、さだくんだけは僕を対等な存在として見てくれた。

それが堪らなく嬉しかった。僕を何時も庇ってくれる彼を見てると、辛い毎日をなんとか過ごしていった。かつちゃん達を宥める彼は常にビシツとしてて、本当にかっこよかった。なんだか一歩引いて僕たちと接してたのは少し寂しかったけど、それでも僕はさだくんみたいな人になりたい。

彼から違う小学校だと聞いたときはかなりショックだった。止める人が居なくなつて、かつちゃんのちよつかいは日に日に酷くなつていったけど、あの背中を思い出せば自然と我慢出来た。

さだくんやオールマイトみたいな、なんにでも立ち向かっていけるヒーローになりた

い。例え無個性の僕でも、夢に向かつて進もう。

そう、決意したんだ！



今日、進路のプリントを返された。かつちゃんは何時も通り自信満々に雄英を目指すと豪語していて、皆かつちゃんを見ていた。

やつぱりかつちゃんは凄い。性格はまあ：なんとも言えないけど、才能も勇気もあつて、人が自然に目を引かれるような人だ。ヒーローとして、必要な才能だと思う。でもまさか急に僕に話の矛先が向くとは思わなかった。かつちゃんが僕を無個性の癖にと馬鹿にしたら皆が僕を笑った。少し反論すれば無理矢理黙らされた。

「ハア……」

その後も、僕のヒーローノートを馬鹿にして爆破したり、来世を見込んでワンチャンダイブなんてとんでもない事を言ってきた。それでもなにも言い返せなくて、そんな僕が嫌になった。

そんなとき、後ろから不気味な声が聞こえた。

「Mサイズの、隠れ蓑お……！」

それは突然と現れた。

どろどろの体で、僕を捕まえた。

「ヴィ、ヴィラン!？」

「へヒヒ、体借りるよお……」

「グッ……ムグウ!？」

こいつ、口の中に!？」

く、苦しい……!？」

「ハア、ハア……クソオ、あのバケモンめえ!？」

悔しがる声が聞こえた。

「う、グウウウウ……!？」

「無駄無駄、大人しく支配……」

——SMASH!!

その声が聞こえた時には、全てが終わっていた。気付けば誰かの腕のなかで、僕に纏わりついていた泥のようなものも吹き飛んでいた。その腕の持ち主は、そつと僕を立ててくれた。その人を見てみると、なんと僕の憧れ、ナンバーワンヒーローのオールマイイトだったのだ。

「お、オオオオオールマイイトオ!？」

「ハツハツハ！ 遅れてしまつて申し訳ない！ でも、もう大丈夫。何故つて？ 私が来た!!」

うわああ！ 本物だあ……!!

「あ、あのよかつたらサインを……あれ？ ノートが……」

「はい、落ちてたよ」

「あ！ ありがとうございまつてもうサインが!？」

す、凄……!!

「それでは機会があれば、また会おう！」

あ！ き、聞きたいことが！

マズイ、もう行つてしまう……!

そのときの僕は、どうかしていた。咄嗟にオールマイイトの足に掴まつてしまったの



だ。

気付けば遙か上空にいた。僕の存在に気付いたオールマイトが、慌てて僕をビルの屋上に下ろした。

「……………おいおい、流石におじさん怒っちゃうぞ」

「お、オール…ゼエ、マイトは、おじさんじゃ…ハア、無いです……………」

「どうして着いてきたんだ。一般市民には、越えちゃいけないラインがある」

言い聞かせるようにオールマイトは僕の行動を注意する。普通なら怒鳴られても仕方ないのに、やっぱりオールマイトは優しい。

「ごめつ、なさい……………でも、聞きたいことが」

唐突に辺り一体が蒸気に包まれる。いきなりなことでも声を出せずにいると、そこにはオールマイトに似たゾンビがいた。痩せ細った体に、しなしなの髪。口の端からは赤い血が垂れている

「ええええええ!! に、偽者!?!」

「……………仕方ない。今から君に、平和の象徴の真の姿を語ろう」

彼から語られた真実は、僕の常識外のことだった。

なんとか理解出来た僕は、この秘密を語らないと固く誓った。そして、その真実を知った上で、僕はオールマイトに聞きたかった。

「ぼ、僕みたいな人間でも、ひ、ヒーローになれますか!? 無個性で、なにも力が無くても、貴方みたいな、カッコいいヒーローに!!」

……遂に言った。僕が一番の憧れの人に。願っちゃいけない道だと知っている。それでも、聞かずにはいられなかった。

「無個性、か。夢を信じるのが悪いこととは口が裂けても言えないが、それでも限度というものがある。君は……ヒーローを目指すべきではないよ」

「そう……ですか」

プロで、一番で、最高のヒーローがそう言うのなら、僕はもう、この道を諦めるしかないのだろうか。そんな人が、こんな姿になるような危険な職業だと知れただけでも、意味はあったのかもしれない。

「代わりと言ってはあれだが、警察という道もある。立派に市民を守る職業だよ」  
オールマイトなりの慰めだろう。何時も気遣いを忘れない人だ。

「ありがとうございます……ごさいます。迷惑を掛けて、本当にすみませんでした……!」

オールナイトは去っていった。

風が吹いていた。少し肌寒く感じてしまう風だった。

## No. 8 親友

オールマイトが僕のせいで逃げたヴィランを追って行つてから、ずっとため息が出る。かつちゃんやさだくんなら、きつとヒーローに迷惑なんてかけないだろう。いつもより騒がしい商店街を通りながら、あの二人のことを思い出す。

……いつもより騒がしい？ 何でだ？

「なあ、この近くでヴィランが出たつてよ！」

「マジ!? ちょっと行つて見てみようぜ！」

ヴィラン!? ま、まさか……!?



案の定、ヴィランは僕のせいで逃げた奴だった。

「そ、そんな……」

お、オールマイトは!? もしかして、話にあつた活動限界なのか!?

「おいおい、あれつて結構大物ヴィランじゃね?」

「学生が人質になって、ヒーローが手を出せないらしいぞ」  
その言葉が聞こえて、僕はヴィランをよく観察する。

「……………!?!」

なんとそこには、幼なじみのかつちゃんがいたのだ。

「か、かつちゃん……………!?!」

周りのヒーロー達が攻めあぐねていた。かつちゃんの爆破の個性が暴走しているからだろう。

その時、一瞬だけかつちゃんが、助けを求めている顔をしていた。

ああ、そうだ。

僕のカッコいいヒーローを思い出せ!

プロのヒーローにだって負けない、何時も僕を守ってくれた、あの背中を……………!

「うわああっ!!」

声をあげながら、必死になって走る。

「な!?! 馬鹿、戻れ!」

「自殺志願者か!?!」

周りの声は聞こえなかった。怖かったヴィランも、不思議と立ち向かっていった。さだくんなら、オールマイトなら、ここで立ち止まったりしない！

「かつちゃん！」

必死にヴィランの体を掻く。何か声が聞こえたけど、それどころじゃなかった。

「おいデク！ テメツ、何で！」

「わかんないよ！ わかんないけど、君が、助けてほしそうな顔してた！」

「っ！」

—— S M A S H !!!

また、声が聞こえた。優しくて、頼もしくて、カッコいい声が。



あの中の事はあんまり覚えてない。覚えてる事なんてヒーローにいつぱい怒られたことと、オールマイトがマスコミに囲まれてて、お礼が言えなかったことぐらいだ。夕焼けが綺麗で、つい足を止めてしまった。

「私が来たあ！」

「うわあ!? お、オールマイト!? 記者に囲まれてたはずじゃ……」

「ハハハ、あのくらい抜けることはどうってことないさ! それより君、あの時、何で走り出したんだい?」

「……それは、わかりません。でも、助けなきやつて、そう……思っただんです」

「やつぱりそうか」

「え?」

オールマイトがまるでわかってたように言う。というか、あの時商店街にいたことに全く気付かなかった。

「過去、英雄として歴史に名を残した人達は、口を揃えてこう言った。『考えるより先に、体が動いていた』と」

その言葉が、僕の胸を大きく揺さぶった。すでに本当の姿に戻ってしまったているオールマイトだけど、その声は確かな重みがあつて、

『君は、ヒーローになれる』

個性がないと知らされたあの時、本当に行つてほしかつた言葉を、一番好きなヒー

ローに言ってくれた。

それが、どうしようもないほど嬉しくて、涙があふれでた。



あれから10ヶ月、毎日を筋トレ兼掃除に費やした。最初の方はすぐにヘトヘトになつてしまつたけど、それでもオールマイトを信じて着いてきた。

そして今日、オールマイトの髪の毛を食うという驚きの個性譲渡方法を体験した僕は雄英高校試験会場に来ていた。恐らく、かつちゃんやさだくんも来ていることだろう。

つい先程、こけそうになつたところを女子に助けられて、その流れで女子と会話することが出来た。今日はいいいことがあるかもしれない！

と、思つてたけど、説明会場で怖い眼鏡の人に注意されたり、肝心のスタートダッシュに遅れたりで、さんざんだ。

もう少しで試験が終わるのに、まだ1ポイントも稼げてない。というか、0ポイントヴィランがヤバすぎる。まさしく破壊の権化だ。



恐怖で足がすくむ。動けない。逃げなきやつて思うのに、体が言うことを聞かない。

「WRYYYYYYYYY！」

そんな声が、聞こえるまでは。

突如として空中に現れる人影。その金髪は、どこかさだくんに見えないこともない。遠すぎてよく見えないけど、なぜか直感で、あれはさだくんだとわかった。

仮想ヴィランの頭が大きくひしゃげ、横に倒れていく。

ま、マズイ！

あそこには瓦礫の下敷きになった人達がいる！ 多分、さだくんは気付いていない！ オールマイトの言葉を思い出す。考えるより先に、体が動いていた。

「SMAAAAAAAAASH!!」

腕を振るう。とんでもない衝撃波と、粉々になって吹き飛んでいく仮想ヴィラン。

「な、何とか、出来た……！」

はじめての個性の感想は、抱く間もなく激痛で意識と共に消えていった。

## No. 9 序章

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ！

無個性のハズの出久が、0ポイントの仮想敵を吹き飛ばしていた！

な、何を言っているのか分からねーと思うが、俺も何が起きたのか分からなかった！  
超スピードだとか……

いや！ 超スピードか!?

おいおい落ち着け俺！

Be cool!! (訳：イケメンになれ!!)

あれ!? 素数って1含むんだっけ!?(アホ)

神父！ 俺友達いないのに素数が助けてくれません！

あ！ そうだ、出久がいた

よ！

……拗ねんなよ素数！ 俺達もう、友達だろ？

出久は確実に無個性だった(急に冷静になるスタイル)。4歳までに個性が発現せず、俺に泣きながらその事を打ち明けてくれたアイツの顔を今でも覚えている。そんな！

まさか演技…!?

いや、たった4歳の子供にできるはずがないし、理由もない。だが、歴史上4歳以上の歳で個性が発現した事例など……。

例外って訳でもなさそう。ニュースになってるハズだし

それは本人に聞くとするか。って言うか、今現在も落下中の出久を助けねば…!

「うっ!」

今になって足が、足がガクガクしてきた! 折れてるかもしれないぬう→

ふざけんなマジで!

久しぶりにカツコついたりなんかするからこうなるんだよお!

すると、落下している出久に近付く影がひとつ。

…あれは、——恐らく個性で浮かしているのだろう——仮想敵の破片に乗った女の子が、出久に手を伸ばしている?

おお! 手が触れた瞬間、出久の勢いが止まった! ……すげえ

って言うか、なんかめっちゃ怪我してない?

ハイリスク・ハイリターンな個性なのか、手足が内出血で赤紫色なんですけど……

ん？ 何だあのライトサイドのエンヤ婆みたいな人は！ 腰めっちゃ曲がってるうー→

うわつ、口がミョーンってなった！ ビックリ人間か！ 否。ぎっくり人間だ!!  
……あく、段々痛くなってきやがった。必死に色んな事考えてたつてのによく。

い、いや別に、駄洒落が想像以上に面白くなかったことをごまかしてる訳じゃねえよ？ ホントだよ？

色んな事考えてなかったら、もつと面白い駄洒落言えたから！  
いくぜ！

”とある蜜柑とアルミ缶”

……決まった

「はいはいドロップだよ。お食べ」  
おいおいハツカ味じゃねえか！ 微妙！



「いやはや、今年は凄かったねえ」

「ああ、実技一位の彼ですか。名前は、確か神田……えーと」

「何てだったって、史上初の三桁越えですからね。筆記はまあまあですが」

「ギリギリだよ。で、どうする？」

「そりゃあ、合格でしょ。こんな強個性、ほつとくわけにはいきませんよ」

「瞬間移動と個性届けに登録されてはいるが、それだけじゃないな。間違いない」

「どっちにせよ、将来彼は強くなりますよ」

「……どうしたもんか。もう少し筆記を頑張ってくれたらねえ」

「やはり、ここは個性を重視すべきですよ」

「では、今年は例年よりも一人多い21人にする、と？」

「……うーん、うん。そうするのが良いだろうね！」



結果として、筆記も実技も微妙な出来だった。いやまあ、実技に関して言えば周りを見る限り、上の方ではあるんだが、上の方ってだけで、まだ上に一杯いるんだよなあ。多分。他人の事が気になって、あまりロボットが倒せなかった。うん。

ああ、ザ・ワールドという最強個性を持ちながら、なんたる不覚！ これじゃDIO様に顔向けできねえ！

筆記はなんだかんだ言って人生で2回目のお受験だし、そこまで悪くないとは思うんだけどなあ。

平均が大体70点くらいかな？　夏休みの頃からコツコツやって来たわりにはあんまし実力に伸びが無い方だと思う。俺ってやっぱ、馬鹿なんだなあ。うん。

まあ、何をうだうだぐちぐちぼそぼそちんちん言ってるのかって、そりやあよお……不安なんだなあオイ！！！！

ええ!? 逆に驚くわ! 何で!? 何でこんなにソワソワしちゃうんだあ!?

「ひええ、受験ってこんなだったっけ!」

自分の部屋で受験への不安のあまりローリングアタックを繰り返す俺氏、今年で（精神）年齢43歳を突破した件。

成長って何だっけ？

まあ、あれから止めれる時間が六秒になった。成長してないと言えば嘘になる。やっぱり、DIO様は首の傷の治癒に伴って止めれる時間が伸びていった感じだったが、俺の場合は身体的な成長に伴って止めれる時間が延びていくのだろう。ついこの間、身長が180を突破した。まだまだ伸びるぜ！

「さ、ささささささだく、くん！」

「うおあッ!? び、吃驚したあ」

「ハ、ハハハ、ハ、ノー！」

思春期の男子の部屋にいきなりとは驚いた！

で？ どうしたんだい奥さん、ニワトリみたいな声だして？

「これ！ 雄英高校から！」

「……おお！」

遂に、来ちゃったってわけか。運命を告げる通知書が……！



前世では、俺の成績があまりにも微妙だったがために、かなり無理をして実力より上の高校に入ったんだ。懐かしい。不思議なことに、受験で頑張つて覚えた事が耳から蒸発していったのを覚えている。いやあ、一瞬で付いていけなくなつたね。うん。

「うゝ、緊張するわね！」

「何だろ、この膨らみ」

ええい、気にしててもしょうがねえ！

いぢー！

『私が来た!!』

「うおおお!!!? 吃驚したあ!!」

「オールマイトよ！ 雄英の教師になつたつて本当だったのね！」

いっつも思うんだけど、この世界ハイテク過ぎない？ 立体映像だよ。3Dじゃない。

い。

んで、合格か現状維持か、どっちだ!?

『おめでどう！ 神田少年、君は実技のみ一位通過での合格だ!』

なんつだつてえ!!? 合格!? しかも一位い!!? フウー!!

ん? 実技”のみ”……?!

『本来なら筆記の点数不足で不合格ギリギリだったんだが、君の実力があまりにも突

出していたものだからね。特別措置をとらせてもらった!!』

筆記そんなに悪かったんかい!?

というのが第一の感想だが、その後もオールマイトの説明は続いた。

やれ救助ポイントだの、唯一の三桁台だの、どういった個性か不明だっただの、どこのこの言ってくれてたんだけど、全然耳に入らなかつたぜ!

ただ言えることはたつた一つ!

”合格”!

その二文字があれば、それでいい!

よっしゃあ! 華の高校生活じゃあ!!

## No. 10 自由

やって来ました。雄英高校〜！

広い！ 二秒で迷った！

と思っただらあつた。一年A組、ドアでか過ぎない!?

「ああ、小さいのもあるのね」

そりやそうか。それはそれとして忍たまを思い出さず。あのでかい門が開いたのを見たことがない。え？ 俺だけ？ まあいいや。

このドアを開けた先に、これからヨロシクしていく仲間がいる。どんな出会いが待っているのか、いざ行かん！ Plus Ultra!

ガラガラガラ（自発的効果音）

「あ？……………あ!？」

……………そこにいたのは金髪つり目のヤンキー爆弾でした。

「マジかよ」

「どういう意味だあ!」

「いや悪い意味ではなく」

久しぶりの再会に、信じられない！ Oh my god！ って叫ぶどつかのおじいちゃんみたいな感じだ。

なんとなくいるんじゃないかなあ、みたいな感じはしたけど、まさか本当にいるとは思わなかった。

っていうか足！ 机の上へのせるとか、喧嘩売つてるとしか思えねえなオイ。先生来たらどうすんだよ！

「久しぶり、だな」

「チツ！」

絵に描いたようなヤンキーだなあ……

あ！

「なあ、かつちゃん」

「その呼び方やめろ殺すぞ」

「辛辣過ぎる。ところで、出久について何か知ってるか？」

「殺すぞ!!」

ええ……

あーもう、そんな大声出すから注目されてんじやん。まあ十人もいないけどよお。

ざわざわ（自発的効果音）

「ざわざわ」

「なに言ってるんだテメエ」

え、声に出てた？ ハズカシー！

それは置いといて、どうやらかつちゃんも出久について何か言うことは無いらしい。

あ、おかつぱの娘がこつちを冷めた目で見ている。

声をかけますか？

いいえ

↓  
いいえ

いいえ

かけれる訳がない。凄いジト目だ。

これってもしかして、俺とかつちゃん同類扱いされてね？ サダトキに999999の

ダメージ！

「グハアツ!？」

「マジで何なんだテメエは!？」

「お前と同類の人間だよ」

「ぶっ殺すぞ!!」

「いや悪い意味ではなく」

「どう悪い意味以外に捉えりやいいんだよ!!」

「君たち! 教室内では静かにしたまえ!!」

うお! 吃驚した! なんか最近こんなんばつかだな。

後ろを振り向くとそこには、巨漢。しかもメガネ。The 真面目! って感じの人がいた。

「ああ? やんのかテメエ! 殺すぞ!」

あーあーあー何でそう突っ掛かるのかね? 学生のうちは素直にごめんで万事解決

でしように

「ころっ!? 君ホントにヒーロー志望か!」

「それな」

おっと、思わず同意の声が出てしまったぜ!

「どこ中だコルアア!」

「私立聡明中学出身、飯田いいたてんや天哉!」

おお、聡明ってめっちゃ進学校じゃん。すげえ。飯田君ね。礼儀正しい真面目な人物で頭良し、見たところ運動も出来るんだろう。顔も整っている。うん、羨ましすぎるな。

「俺は神田定時。こっちのヤンキーは爆豪勝己だ。よろしく」

「誰がヤンキーだオラア!」

「……ああ。神田君、と爆豪君。こちらこそよろしく」

「ケツ！」

かっちゃん、ステイ！

「ん？」

お、あれは！

出k

「このクソナードがあー！」

ええ……、クソナードて

かっちゃんが突つかかる0秒前……と思いきや、意外にも飯田君が出久に詰め寄った。何か話してるっぽいのが、かっちゃんが直ぐにでも文字通り爆発しそうなのでハラハラして聞き取れない。

っていうか、何気に出久の後ろに可愛い系の女の子がいるんだけど……

これはかっちゃんどころの話じゃねえぞ!? 出久ってそういう性格になっちゃったのか!? リア充になったから、あんな超パワー出せるようになったってか? ケツ!

……おいおい、さらに後ろに(暫定)ホームレスがいるんだけど!? 何あれ!?

うわっ、十秒チャージを一秒で済ませやがった! 何あれ!?

「ハイ、静かになるまで八秒掛かりました。時間は有限。君達は合理性に欠くね」

え、もしかして担任？ 嘘だろ……!?

「担任の相澤消太だ。よろしくね」

嘘だろおおおおお!!



いや、あれが担任なんて思わないじゃん？ 確かに合理的だが、教師が学校に寝袋持参はどうかと。

「それじゃあ、今から個性把握テストを行う」

これはあれか？ 生徒の事は考えてませんっていう宣戦布告か？

……あれだ、えーっと、そう！ センセイ君主かよ！（言いたかっただけ）

「え!! 入学式は!! ガイダンスは!!」

おお、聞くねえ。出久の彼女。気持ちわかる。



「お前ら、何か勘違いしてないか？　ここは英雄ヒーロー科だぞ。そんなことして暇があるとも思ったのか？」

「で、でもー！」

「ここでは自由を売り文句にしてる。そしてそれは教師側にも当てはまる。そうだな、このテストで最下位になった者は——」

ん、言ってることの筋は通ってる。のかな？　ま、ワカチコ方式で細かいことは気にしない。それが俺。さて、最下位になったらどんな罰が待っているのやら。

「——即、除籍とする」

……流石にそれは自由すぎるぜ、相澤先生。

## No. 11 素質

相澤先生が仰られた個性把握テスト。所謂、体力テストの個性使ったバージョン。

種目は、50m走、持久走、反復横跳び、ハンドボール投げ、握力測定、上体起こし、長座体前屈、立ち幅跳びだったか。

中学では、鍛えていたお陰か結構高い記録を出せていたが、今回は体力テストにあらず。個性をうまく使えばとんでもない記録も夢じゃない。具体的には50m走ね！

んで、俺は今ハンドボールを握って円の中に立っている。何故か指名されちゃったぜ。

あ、ちなみに俺の中学の頃の記録は61mだ。こつそりザ・ワールドを使おうかとも思ったがやめておいた。流石俺。

ザ・ワールドの腕を、俺の腕と同化させる。これで傍目からは、俺が普通に投げたように見えるだろう。隠す意味は特に無いッ！ あえて言うなら、そう！ クールで謎めいたキャラでヒーローになりたいという俺の願望！

あえて言うなら、モテたい!!

……そんじや、いつきまゝす！

「WRYYYY！」

——後の出久は語る。このときの俺の声に対する疑問をクラスの皆と共有できた気がする、と。

「……810m」

フツ、まあまあかな

「おお、すげえー！」

「中学と違って個性使っているのか！ ワクワクするぜ！」

横で相澤先生が「ワクワクする……ね。甘いな」とか言ってたけど、なんかすつごく怖いんだけど、俺はいいと思うぜ！

ていうか、自分の予想を遥かに上回っててビビった。ま、校舎を殴って揺らしたスタプラと同レベルのパワー持つてるんだし、かなりの記録が出るだろうとは思ってたんだけど、まさかこれほどとは……！

ザ・ワールド、恐ろしい子！

「おい、神田。話がある。後で俺んどこ来い」

へああつ!? ナ、ナンデ!?



スタープラチナやザ・ワールドと言った人型スタンドは、俺がさつきハンドボール投げでやったときのように、本体の人間と同化することが出来る。例えば腕を同化させると、その腕は超人染みた力を発揮し、脚に同化させると、その脚はやはり超人染みた力を発揮する。俺はこれを、『スタン同化』ドッキングと名付けよう。ダサイなんて声は聞こえない。

まあ、そんな訳で、個性把握テストの内の3つぐらいは俺が一位だった。

ただ、持久走バイクはズルいやハンドボール∞つてあるんだ投げ、反復横跳び圧倒的なブドウ味のグミ感に関しては、上には上がいると痛感した。適材適所ってやつだ。ザ・ワールドは、時を止めるっていう無敵の能力を抜きに考えるなら、言うなれば“増強型の個性”を同化させて使用していると言った感じだ。50m走がいい例だな。流石に0.2秒はやり過ぎた。

握力は俺の片手+ザ・ワールドの両手。

長座体前屈は敢えてザ・ワールドを使わなかった。ハンドボール投げで隠した意味が無くなる。

立ち幅跳びは、時を止める↓走る↓ザ・ワールドで俺を投げる↓停止解除↓着地。  
読者様  
 ハイそこ、ザ・ワールドが本体とか言わない。

ちなみに、出久の個性に關してはかつちゃんも知らないようだ。というか、めっちゃキレてたなあ。出久に聞いてみても黙秘された。

「ひ、久しぶりだね！ さ、さだくん！ 覚えてる？」

出久は、ハンドボール投げの時に個性によつて痛めた右手の人差し指に包帯を巻いている。人差し指だけであのパワーはヤバい。腕ならどうなっていたことやら。

「勿論。これからもよろしくな」

握手握手。左手でね。しかし、変わつてないな。出久もかつちゃんと同じで変わったのは声と身長ぐらいだ。

ちなみに出久の隣にいた女の子は麗日うららかにお茶子おちゃこさん。個性は『無重力』ゼロ・グラビティ。触れたものを浮かせられるらしい。この人こそハンドボール投げで∞を叩き出した張本人である。ただ、浮かせられる量には限りがあり、オーバーすると酔う。と、明白な弱点がある個性だ。

さらにその隣の飯田君の個性は『エンジン』。ふくらはぎにエンジンがついてて、足が速くなる。シンプルゆえに強力みたいな感じだ。0.2秒とか出してすんませんでした。

「しかし神田君、君の個性は一体何なんだい？ 超パワーかと思えば瞬間移動だったり、触れてもないのに物を動かしたり」

「考えられる最有力候補としては念力だけど、それだと超パワーは説明できても瞬間移動は説明できない。持久走から見ると、瞬間移動は連続してできない。やっぱり2つの個性が一つになってるとしか思えない。もしそうだとすると、問題は対策方法だ。移動や攻撃は十分以上。射程も恐らくかなり長い。どうすれば……いや、そもそも把握しきれないのに対策もおかしな話か……。今わかってるだけでも念力に瞬間移動がある。瞬間移動で後ろに回り込んで念力の超パワーで一撃なんてされたら厄介すぎる。いきなりされたら回避は不可能に近いし、避けれたとしてもブツブツブツ……」

前言撤回！ メツチャ変わってるう→→→

分析とかされたの初めてだわ。なんか、そこはかとなく恥ずかしい。

お、どうやらそろそろ結果発表らしい。狙うはただ一つ……

ナンバーワンのみツ!!

## No. 12 渾名

ぶつちやけ、一位とか興味ないっす。いやホント興味ないんで。

そんなことより、相澤先生の話とやらが気になって仕方ない、どうも神田定時です。  
現在学生！ 43歳!!

「んじゃ、結果を発表する」

一位とかあ、興味ないんでええええええええ!!

1：八百万やおよろず百もも

2：神田定時

3：轟とどろ焦凍しやうとう

4：爆豪 勝己

5：飯田 天哉

6：常闇 踏陰

7：障子 目蔵

8 : 尾白おしろ 猿夫ましろお

9 : 切島きりしま 鋭児郎えいじろう

10 : 芦戸あしど 三奈みな

11 : 麗日 お茶子

・ ・ ・ ・

ええええええつ

2位!? !!?!?!?!

え、に、2位!? マジかよ!

……ああもう、そうだよ! 興味ないとか嘘だよ! 八百万って誰だよ!

キヨロキヨロ (自発的効果音)

……ハッ!!

あの「当たり前ですわ」とか言ってるけど思いつきりドヤ顔のボインか! ボインな



のかあ!?

揺る……じゃない、許す!

まあ、何を許すんだって話だが………オイよく見たら持久走でバイク乗り回してた人じゃねえか!

チツクシヨオオオ!! 悔しいです!

轟が誰だかは知らんが、俺、かつちゃんにめつちや睨まれてるじゃねえかよ! 怖ええ。初めて本能とやらで察知できたわ。

かつちゃんは気性の荒いライオンって感じだが、言つちやえば俺はアルパカだぜ!?

精神的に無理!

……ああ、皆名前がすごい個性的だな。うん。名が体を表しすぎてるよ。

なんだよ上鳴かみなり電気でんきってよお。個性が先に発現したのでこの名前にしました! みたいいな。

んん? 他にはどんな名前の奴がいんのかね?

・ ・ ・

21: 緑谷 出久

ええ!? 嘘だろ出久! 指をあんなにポロポロにするまで頑張ってたのに……!  
……ど、どうしよ、相澤先生に頼んで、なんとか除籍だけは取り消さねば……!!

「先生!」

「……どうした、神田」

「どうか、先程の発言の取り消しを……!」

くう! お願い! 折角、再開したばかりでもうお別れとか悲しすぎる!

……それに、さつき出久の目を見て思ったんだ! ”カツコいい” ってよお! 人を  
見る目の無い俺でも分かった。アイツは凄いいヒーローになる! 多分っ!!

「発言? ああ、除籍のことか」

「はい! お願いします!!」

「あれは……………嘘だ」

へ？

え？

…………う、うそ？

「君達の実力を最大限引き出すための、合理的虚偽」

そ、そんな、そんなことあるかよ……

うくううう、あんまりだ…へエエイ!! あアアアあんまりだア

アアア!!

アヒイイ!! アヒイイ!! アヒイ!! フオオオオオオオオオ!!

恥つず!! クソ恥ずかしいじゃねえかドチクシヨウがつ!!

「…………そんなこと、少し考えれば分かりますわ」

オゴツハ!? まさかの追撃!? クソツ、覚えてろよ1<sup>ポイン</sup>位!



「ああ、来たか神田」

「それで、話とは？」

「……お前の個性についてだが、何か隠してるな？」

「ウツ！ やはり気付かれてたか！」

「お前の個性届けには瞬間移動と書かれてはいるが、どう見ても違う」

ああ、そういうやそんなの書いたっけな。知られたところで、同じような能力持つてなきや対処のしようもないんだけど、4部の承太郎みたいに警戒されまくってそもそもヴィランに逃げられるみたいにな事になるのも嫌だし、適当に瞬間移動って書いたんだ。そうだそうだ。

で、どうしようか……

「……まあ良い。詳しい話は今度だ」

黙ってたら許されたんですが……

「はあ」

「別件が入ったんでな。気にするな」

さ、さいですか。まあ言われなくとも気にしませんかね  
つて言うか、いずれバレるかもしれないんだったら、今のうちに言つといた方が良  
かったかな……？

折角だし、このままでいきますか！



はあ。昨日はひどい目にあつた。自業自得とか言うな！ オデノココロハボドボド  
ダ！

……切り替えていこう！ 人生はメリハリが大事だ。と、誰かが言つてた気がする。  
はあああ。ドヤつておきながらの2位、1位の子には見向きもされず、挙げ句の果て  
に先生の嘘に気づかず先走つて自爆。とんでもねえ大馬鹿野郎っぷりだったなあ……  
はあああああ。

……何より一番嫌なのはよお、かつちゃんにめつちや絡まれてるつて事なんだよなあ  
！

「オイ定時<sup>ていじ</sup>！ 飯食いに行つぞ！」

「“ていじ”じゃない。“さだとき”」

「知ってる」

「ニヤニヤすんな！ 性格悪いぞ！」

「お！ 神田に爆豪<sup>モブ</sup>！ 俺とメシ行かねえ？」

「ああ？ なんだよ脇役<sup>モブ</sup>」

「ヒデエ！ モブは駄目でしょ。流石に失礼極まりない。」

「てか、すんげえ髪の毛してんな！ 俺の隣のヤンキーも大概だけどさ。カツチカチじゃん。……ちよつと触つてみたい」

「モブじゃねえ！ 俺は切島 鋭児郎！ よろしく！」

「よろしくつと。握手握手。時止めて触ろつかない……。ばれないよね？」

「ケツ！ 行くぞ定時<sup>ていじ</sup>」

「ていじ？ 神田つて名前 さだとき”じゃねえの？ さだくんつて呼ばれてなかったっけ」

「シレッと着いてくんない！」

「いいじゃねか、メシぐらい！」

「おお、トゲトゲとバクハツが並んで……！ 写真撮りたいけど、スマホ禁止なんだ

よね。

「爆豪と神田はやつぱ知り合いなんだよな？ やけに仲良いし、渾名で呼びあつてるし」

ていじは渾名じゃねえ！ どつちかって言うのと、つて言うか俺の渾名は「さだくん」しか無えよ！ ま、仲が良いのは否定せんがね！

切島君ね。覚えたぜ！

「しっかし、二人とも凄え個性だよな！ 個性把握テストでもトップクラスだったし！」

2位だったし！ トップクラスだけど、トップじゃなかったし！ でももつと頑張ればトップだったし！ 悔しいし！ しかもなんかコイツ怖えし！

「殺すぞクソ髪！」

「はああああああ……」

「予想外の反応!？」

はああああああ……。嫌だねえ。デン！女々しくて、女々しくて、女々しくて！

辛あいよお〜ほほほお！

まあ嘘なんですけど！

アダルトでダンディでクールなこの俺が、その程度でウジウジする訳が無い！ 今回

は少しばかりバイクボインに有利なルールだったってだけだ。次は勝つよ。絶対！  
誰にも負けない男になる！

「でもよお、思ったより雄英の授業って普通なんだな！ やってる授業のレベルは高いけど、あんましヒーローって感じがしねえって言うかさ？ 不満があるって訳じゃ無えけど」

お、(切島君が)喋ってる内に、食堂についたようだ。この食堂は、プロヒーローのランチラツシユなる人物が管理していて、とにかくご飯が美味しい。

ご飯と言っても、白米って意味のご飯ではなく、食事全般って意味ね。白米に力入れることに代わりはないけどさ。

「やっぱ美味えな、ここのメシはよー！」

あ、後ろでランチラツシユが「グツ！」ってしてる。美味いって言うてくれて嬉しいんだらう。

「最終的に、白米に落ち着くよね！」

と、いつもの決め台詞で締めるのであった。



## No. 13 訓練

「わ〜た〜し〜が〜！」

この声は！ オールマイト！

「普通にドアから来た!!」

いやドアから来るんかい！

まあ、そこからしか入れないんだけどさ！ 当たり前前の事なのに何故か新鮮さを感じ

るこの不思議！

流石オールマイト！ 俺達に出来ない事を平然とやってのける！ そこに痺れる、憧

れるう〜！

「おお〜！ 本物だ！」

「雄英の教師になったって本当だったんだね」

「作画が違え！」

「シルバーエイジのコスチュームだあ!!」

皆、伝説のヒーローを見れて嬉しいのだろう。一人、コスチュームに興奮するというオタク感満載の台詞だったが……

言わずもがな、出久だ。うん。昔っからのファンだったもんね。

さて、オールマイトは一体どんな授業を受けさせてくれるのか……！

「今回の授業は……コレ！」

む！ 席が後ろの方だからオールマイトが持っている札が見えぬ！

「戦闘訓練だ!!」

わざわざ言ってくれてありがとうございます、つてマジか！ 遂に、ヒーロー科っぽいことやるんですね！ 先生！



そして今、俺達は戦闘訓練をするために体育館Ωやらなんやらに来てる訳なんだが、なんとコスチュームを着ているのだ！ まさかこんな形でコスチュームを着るとは思わなんだ。

俺のコスチュームはぶつちやけると、最終決戦のジョセフの血を吸ってハイになる前のDIO様だ。

背中が開いている黒いインナーを着用し、その上に黄色の上着を着て、同じく黄色いズボンを履き、つま先が上方へカーブしている靴に、膝当てとベルトにはハートの飾り、ふくらはぎまである真っ赤なマント。それ以外だと、ハートの飾り部分が金属製であとは布製のサークレットを着用し、リング状の耳飾りに、金属製の腕輪と足環をしている。まんまだ。まんま。

「何事もまずは形からってね！ 似合ってるぜ少年少女ー！」

いやあ、少し恥ずかしい。完成度が高すぎてビックリしたけど、コスプレ感出てない？ 服に着られてるって言う恥ずかしい状態になつてなきや良いんだが……

うっ！ 結構な量の視線を感じる！ 似合つて無いかねえ……？

ついつい深夜テンションで張り切つてデザイン描いたもんだから、冷めた今となつてはただただ恥ずかしい！

……良い年こいた大人が何やってんだか。せめて、少しでもマシに見えるように胸を張つていこう！

お、出久じゃないか！ めつちや緑色してんな。名字の緑谷から取つたのだろうか。

あつ！ あの頭に付いているウサギの耳みたいなヤツは、オールマイトの触覚！ なるほどお。 出久も俺と同じく、尊敬する人からオマーヂュしているのか。 カッコいいぜ！

「凄い格好いいよ、さだくん！」

「お前もな。 良い触覚だ」

「ハハハ……、触覚………うん、確かに触覚だね」

あれ、言葉間違えた？ いやだって、そんならしいしか特徴無いんだもん！ しょうがないじゃあないか

それより皆、ヒーローって感じがするなあ。 うん、全然クラスメイトの名前が分からん！ えーと、あのきわどい格好の子が八百万だっけ？ んで、切島君だろ。 あのフルアーマーっぽいのは……

「共に頑張ろう、神田君！」

飯田君か！ すんげえ細かく作られてんなあ

お、あのピンクと黒が主体のコスチュームは、麗日さんと見た！

「もつとしっかり要望書いとけばよかった！ パツパツになった……」

分かるう〜！。 サイズに関して言えば、俺もかなりギリギリだ。 何せ、これを申し込んだ時は俺まだ170cm位だったし。 伸縮性高めって書いてよかつたぜ。

「それじゃ、今回の授業について詳しく説明するぞ！」

まずは設定からだ。核ミサイルを隠し持っていた複数人のヴィランがこの市街地を占拠してしまった！

ヴィランの本拠地は目の前のこのビルで、核もここにある。既に住民は避難しているものとするぞ！

今回の授業は、そこに駆け付けたヒーロー達との多数対多数を想定した戦闘訓練だ！  
1チーム7人で3チームのAチーム、Bチーム、Cチームに別れる。決め方はコレだ  
！」

オールマイトが取り出したのは、至ってシンプルな“クジ”だ。割り箸の先つちよを赤・青・黄の三色に染めてあり、それぞれ7本入っているようだ。どうせなら仲の良い人と組みたいもんだな。

「先生！ 質問をしてもよろしいで……………」

今思い出したんだが、中学生の時、俺と小学校から一緒の特別仲が良かった友達が一  
人いたんだが、体育で二人組になるとき、俺には目もくれず別の奴と組みやがったんだ。  
あの悲しみは一生忘れられない。

今思い出したんだがね！ ハッハッハ！ ……………ハア

「……………だと思っようよ」

「そういうことだったのですね！ 失礼致しました！」

あれえ？ 何て言ったんだろお？ ヤツベエ、思いつき聞き逃しちやった！

ま、良いや（アホ）

「……………それじゃ、説明を続けるぞ！」

Aチーム、Bチーム、Cチームに別れたら、その中から更に2チーム、例えばAチームとBチームでそれぞれヒーローチームと敵チームを決める。そしてこの2チームで戦闘訓練をするんだ。

残りの1チームは私と一緒に観戦をする。ここまでは良いかな？」

あ、カンペだ。

まあそれは置いといて、まずはA対B、次にB対Cで最後にC対Aみたいな感じか。でもそれだと、個性の情報が知れる分、AとBが少し不利なんじゃないか？

「それだと、最初に戦ったチームが不利になるんじゃないですか？」

どうやら、俺と同じ考えの奴がいるらしい。さっきの誰かの声に他の何人かが頷いている。

「そう、このルールではどうしても最初に戦ったチームが不利になる。

だけどね芦戸少女、プロヒーローになると、どうしても個性の情報は知れ渡ってしま  
うんだ。

ヴィランと戦闘になった場合、個性対策はされていると考えた方が良い。

だから今回は、最初の戦闘で勝ったチームが、次の戦闘ではヒーローチームになるんだ。

つまり最初に戦ったチームの勝った方が次のチームと戦う、ということだね！

そして最後は、まだ戦っていないチーム同士で戦闘訓練をするぞ！」

あ、そうなの。プロヒーローも楽じゃ無いらしい。ただまあ何となくだが理解できた。要は、勝てば良からうなのだアーツ!! の一言に限る。そういう事を言っているんだろう？

あと、質問した女子の名前に見覚えがありませんが……

運命？ 運命なんですかコレ？ 命、運んじやったんじゃないですかコレエ！ ……

小学生か俺は

「それじゃ、クジを引いてチーム分けをするよ！ 出席番号順にならんで、順番にクジを引くんだ！」

よっしゃ、俺っちの豪運見せてやんよ！ 可愛い女の子と一緒に良いな！



・ 赤<sup>A</sup>の<sup>k</sup>Aチ<sup>a</sup>ーム  
・ 青<sup>あお</sup>山<sup>やま</sup> 優<sup>ゆう</sup>雅<sup>が</sup>  
・ 飯<sup>い</sup>田<sup>でん</sup> 天<sup>てん</sup>哉<sup>がい</sup>  
・ 尾<sup>お</sup>白<sup>しろ</sup> 猿<sup>ざる</sup>夫<sup>ぶ</sup>  
・ 神<sup>かみ</sup>田<sup>でん</sup> 定<sup>じやう</sup>時<sup>じ</sup>  
・ 砂<sup>さ</sup>糖<sup>とう</sup> 力<sup>りき</sup>道<sup>どう</sup>  
・ 瀬<sup>せ</sup>呂<sup>ろ</sup> 範<sup>はん</sup>太<sup>た</sup>  
・ 峰<sup>みね</sup>田<sup>た</sup> 実<sup>みのる</sup>  
青<sup>B</sup>の<sup>l</sup>Bチ<sup>u</sup>ーム  
・ 芦<sup>あし</sup>戸<sup>こ</sup> 三<sup>さん</sup>奈<sup>な</sup>  
・ 麗<sup>れい</sup>日<sup>にち</sup> お茶<sup>お</sup>子<sup>こ</sup>  
・ 切<sup>き</sup>島<sup>しま</sup> 鋭<sup>えい</sup>児<sup>に</sup>郎<sup>らう</sup>  
・ 障<sup>しょう</sup>子<sup>し</sup> 目<sup>め</sup>蔵<sup>ざう</sup>  
・ 耳<sup>みみ</sup>郎<sup>らう</sup> 響<sup>きやう</sup>香<sup>かう</sup>  
・ 葉<sup>は</sup>隠<sup>かく</sup> 透<sup>とわ</sup>  
・ 緑<sup>りく</sup>谷<sup>たに</sup> 出<sup>い</sup>久<sup>きう</sup>



黄のCチーム

・蛙吹あすい 梅雨つゆ

・上鳴 電気

・口田こうだ 甲司こうじ

・常闇 踏陰

・轟 焦凍

・爆豪 勝己

・八百万 百

……おおいっ!?

野郎しかいねえじゃねえか!! どうなってんだ、このド畜生がツ!!

No. 14  
仲間

Aチーム

- ・青山 優雅
- ・飯田 天哉
- ・尾白 猿夫
- ・神田 定時
- ・砂糖 力道
- ・瀬呂 範太
- ・峰田 実



おおおうおおおう！ なんの罰ゲームだコリヤア!? どこ見ても女の”お”の字も  
無えじやねえか!

あ、男も”お”の字から始まるわ。失敬失敬

そおんなコトよりい!!

Bチームの対策を考えなくてはな!

Aチーム

・青山 優雅

・飯田 天哉

・尾白 猿夫

・神田 定時

・砂糖 力道

・瀬呂 範太

・峰田 実

Bチーム

・芦戸 三奈

・麗日 お茶子

・切島 鋭児郎

・障子 目蔵

・耳郎 響香

・葉隠 透

・緑谷 出久

V S

という編成なわけだが、この中で俺が個性を詳しく知ってる人は三人。14人中3人だから、5人に1人知ってるか知ってないかって所だ。そしてマズイ事に、俺はAチームのメンバーの個性を1人しか知らない。ご存知、飯田君だ。

あ、そう言えばあの紫色の頭の子は俺のメモ用紙一枚分くらいの記憶容量の中に残ってる。頭から2つのグミをもぎ取って地面にくっ付けたと思ったら、グミとグミの間をすんごい速さで動いてた子だ。

「皆！ 我々Aチームは榮譽あるヒーロー役に選ばれた！ 真面目に、誠実に、真剣にヒーローに成りきろう！」

「なあ飯田、お前張り切りすぎだつて。もつと肩の力抜いてこうぜ？」

「何を言っているんだ瀬呂君！ これは訓練なんだぞ！」

「……はっ!! これは合法的に女子のアンナトコロやコンナトコロをさわれるチャンス！ 絶対にものにすつぞオラア!!」

「なつ……！ み、峰田君!?!」

うわ、こいつさては変態だな。これは付き合い方を考えなきやな。

……お前が言うなつて？ やかましいッ！

それはそれとして、ここは一発ガツンと言つてやりますかあ！

「おい」

と峰田君とやらに言つた途端、何故か全員がこつち向いた。いやそのリアクションは流石の俺も予想外。変態アピールだけに言うつもりだったのに！ ……仕方ない、このままガツンと言うか！

飯田君がねッ!!

「もつと言つてやれ。飯田君」

「む！……君がそう言ってくれるなら心強い！ 聞いたか皆、真面目に取り組もうとしているのは、ぼ……俺だけじゃない。それはきつとBチームも同じことだ！ 肩の力を抜くというのにも時には必要かもしれないが、今回のこの訓練は相手だけでなく、自分のチームの事も考えて行動しよう！」

「うっ……、ああもう分かったって！ 真面目にやるよ！」

「ん。流石のオイラもそこまで言われるとなあ……」

「おう！ 俺もやる気がムンムン湧いて来やがったぜ！」

プロレスラーみたいなヒーローコスチュームのムキムキマツチョが大声で喋る。まあ、俺もガタイはいい方だ。前世もこの肉体が欲しかった

「……なんかその言い方気持ち悪いよ」

おお、尻尾だ。ちよつと触ってみたい。

「フフツ！ クールにビューティーにオシャンティーに、だね！ 僕にお任せ！」

うーん、最初はバナナぶら下げた野郎ばつかの最悪のチームかと思つたが、楽しくやつて行けそうだ。特に最後のセリフの奴とか。

……皆の名前はまあ、後で良いだろ。

「それじゃ、戦闘についての説明をするぞ！」

もうわかりきつてるだろうけど、この戦闘訓練は7対7で行われるぞ！

フィールドは市街地一帯だ。敵の本拠地は廃ビルで、核ミサイルを隠し持っている  
仮定してくれよ！

戦闘を終了させる方法は、相手チーム全員を戦闘不能にする事！

これはさつき配った特製テープで相手を縛れば達成だ！

そして、ヒーローチームのみ、核ミサイルの確保による勝利も認められる！

また、この私ともう戦闘を続行出来ないと判断した場合、一定区間で設置された小型  
マイクからその事を放送する。

その放送が聞こえたら直ちに戦闘を終了してくれ！」

長い！ 説明が長い！ 俺の理解力を完全に超えてきやがるツ!! ああいや、そんな  
のどうでも良いんだ。どうでも。

何故なら、ようやくザ・ワールドの強さを披露できるのだから！



Bチーム

・芦戸 三奈

- ・麗日 お茶子
- ・切島 鋭児郎
- ・障子 目蔵
- ・耳郎 響香
- ・葉隠 透
- ・緑谷 出久



オールマイトの放送が入る前、Aチームの面々がグダグダと喋っていた頃、BチームはAチームと違って、アホな男子が少ないせいもあってか話し合いはスムーズに進んでいた。特に話されているのは、やはり我らが神田<sup>ザ・ワールド</sup> 定時<sup>ド</sup>についてであった。

「……で、どうする？ ウチは神田さえどうにかすれば勝てるかと踏んでるんだけど」と、自分の考えを主張する、前髪が切り揃えられた絶壁の女子生徒。名を、耳郎 響香という。

「油断は禁物だぞ。ただでさえ不確定要素の多い乱戦になる可能性が高い。ただ、確かに神田の個性は最大限注意した方が良い事に違いはない」

それに応えたのは、手が3対、つまり6本ある背の高い男子生徒。名を、障子 目蔵という

「そっか」

「そうなったとき、多分あつちの方が戦闘力は高いよね。私の個性は乱戦には向かないし」

と、自らの個性の弱点を語つたのは、”透明”という言葉以外に表し方が分からない女子生徒。名を、葉隠 透という。

「私はそんなことないと思うけどな」

と、否定する肌がピンクで目は黒色、さらには角まで生やしたエイリアンのような女子生徒。名を、芦戸 三奈という。

「ぼ、ぼぼ、僕もそう、お、思うよ葉隠さん！こ、この訓練は直接戦う、ひ、必要も無いわけだし……」

地味ッ！ あまりにも地味ッ！！ その名も緑谷<sup>じ</sup> 出久<sup>み</sup>！

「緑谷！ その考えはあんまし男らしくねえぞ！」

硬<sup>切島</sup>い！ 説明<sup>説</sup>不要<sup>児郎</sup>ッ！！

「男らしくって何さ。これは訓練なんだよ？ 私達は敵に成りきらなきゃ！」

「ま、まあそうだけだよ……」



「まあとにかく、頑張ろう、皆！」

「おう！」

## No. 15 vs Bチームその1 頑健

早速、俺達AチームはBチームの拠点であるビルからかなり離れた所に移動していた。相変わらず、ここが学校だということをつい忘れちまう程の広さだ。

『AチームとBチームの皆、準備はいいかい？ それじゃ、訓練——』  
「いよいよだ。作戦会議の結果、俺は持ち前の移動速度を活かして敵の拠点到特効を仕掛けるという役を承った。正直に言おう。負ける気はしない！」

『——開始！』

スタン同化！<sup>ドッキング</sup> からのダツシユ！  
走れ走れ走れええ！

「ひゅ〜！ はっや〜！」

「瞬間移動無しでも飯田と同レベルとか、どんだけ強個性なんだよ。才能マンめ！」  
後ろから聞こえた声は敢えて無視する。今はただ、前を向いて走ろう。

はは、ビュンビュンとビルが通り過ぎて行く。やべえ！ 本気で走ったのはこれが初めてだが、凄いスピードだ！

と、前方に敵チーム発見！ 数は2！ まだ気付かれていない！

えーと、誰だっけ？ このパツツンおかつぱとエイリアンピンク……

「分かんらん！ ザ・ワールド！」

止まれい、時よ!!

ブウーーーーーーン！

フツフツフ、後はテープを巻けばそれで終わりだ。楽勝楽勝！

ザ・ワールドと一緒に、大急ぎでテープを敵に巻き付ける。停止解除まであと3秒！

…2 …1 …0！

ギリギリ巻き終わった！

「なっ!?!」

「えええ!!? い、いつの間に!?! 何で!?! どうやって!?!」

ふふ、驚いてる驚いてる！ 周りにはもう誰もいないようだし、さっさと次行こ、次。



「くうく！ 悔しいい！」

「流石だわ。多分これ神田の個性だよ。テープをウチらの周りに瞬間移動させたんだと思う」

「てことは、テレポート出来るのはなにも自分自身だけじゃ無いって事!？」

「まだ推測の範囲は出ないけど。もつと慎重に行動すべきだったかな」

「あくもく！ でもま、いつか！ 予想通り、神田には見付からなかったもんね！」  
「うん。なんとか最悪の事態は免れた」



おっと、切島君だ。危ない危ない、もうちよつとで彼の視界に入るところだった。

何やら電話をしている。先程オールマイイトから配布された物だ。やけに余裕だな。結構奥の方まで来たし、切島君もまさか俺がいるとは思わないのだろう。

「神田。いるんだろ、そこに！」

「!？」

な、何故バレた!? 音を出さずに近付いたはず……! !

……もしかして電話か？ 誰かが俺を見て、その様子を電話で伝えてる。といった感じか。そう言えば、4部の最終決戦でも、吉良吉影が自分の父ちゃん（幽霊）を使っ  
て見えない東方仗助の位置を確認してたっけ。

とにもかくにも、問題はそいつがどこにいるかだ。ザ・ワールドに周りを見てもらおう。

「……隠れてないで出てこいよ。ここは一つ、男らしく一対一のバトルで決めようぜ  
！」

どうする？ 行くか、行かずに伏兵探しか

……ぶっちゃけ、行ってもいいと思ってる。訓練の模範回答は、このままザ・ワールドで敵を確保なんだろうけど、そうしたくないって思ってる俺がいるんだ。

どっちにしろ、ザ・ワールドで伏兵を探しても見つからなかった。どうやら切島君は電話を既に切ったようだし、不意打ちに気を配っておけば最悪の事態にはならないだろう。

……よし、行くか！

「来たか神田！ お前なら俺に伝えてくれると思ってたぜ！」

「なんとも敵らしくない事をするんだな。まあ俺も……！」

「ヒーローらしくない事してる。ってか？」

「フ、さっさと終わらせよう」

「その余裕、崩させてもらうぜッ!!」

そう言つて、切島君はこちらに一直線に向かつて来る。よくよく見れば、彼の手はガチガチに尖つていた。個性は“硬化”だったつけ？ ザ・ワールドの拳が効くかどうか……!!

スタン同化!<sup>ドッキング</sup>と同時に切島君が放つた顔面狙いの拳を横に体をずらして避け、今度はこつちが思いつきり拳を腹に叩き付ける

「フンッ!!」

「ぐう!？」

お、効いたか？ いや、それでもなさそうだな。

しかしホントに硬えな！ 殴つたこつちの手がちよつとヒリヒリするってどんだけだよ！

「流石だな、その硬さ！」

「お前のパンチもすげえよ。硬化した状態で痛いつて感じたの初めてだぜ！」

そりゃ良かった。なら何十発と喰らわせてやる！

おおつと、いきなり横薙ぎの硬化チョップ！ これは避けきれねえ。ザ・ワールドがなければ、の話だなッ！

ザ・ワールド！ 時よ止まれ！

ブウーーーーー！

余裕の回避。からの後ろに回り込み。

そして時は動き出す……

「っ！ 瞬間移動か……！ 何処に!？」

「後ろだ」

俺がそう言った途端、切島君は腕をクロスさせながら振り向く。勿論、上半身は一瞬で硬化していた。

凄いい反射神経だ。いかに彼が本気で俺に向かってきているのか理解できるほどに。恐らく、俺の時間停止（敢えて瞬間移動と認識させてる）を最も警戒していたのだろう。対応力が違うね。

「何でわざわざ俺に声かけたんだ？ その気になりや、いつでもテープで捕縛出来た  
だろ……！」

「男らしくないだろ？ そんな事」

「！」

……今の台詞で正解らしい。目に見えて切島君のテンションが上がる。俺もそうだ。本気で個性を使ったのは中1以来。それも喧嘩にだった。ザ・ワールドも、この2年間





「ま、だ……だ！」

うおっ!? まだ意識あるんかい!?

なんてタフさだ! 俺は慌てて手を離し、後ろに跳躍して距離を取る。

「ハア……ハア……ハア……」

「これ以上は危険だ。やめとけ、切島君!」

「は……はっ! 敵の……心配、か……? 俺はまだ、ここに立ってる……ぜ!!」

そう言つて、切島君はファイティングポーズを取つた。なんて野郎だ。あれだけのラツシユを叩き込んだつて言うのに!

「う、ぐっ!! ハア、ハア……」

だが、どうやら次の一撃が、最後の一撃になりそうだ。

切島君もきつと良いヒーローになる。そう直感で感じた。だって、どう見たつてもう彼は限界なのに、その瞳に一切の曇りが無いのだから。

……ただまあ、今日のところは終わらせよう。俺の、本気の一撃で!

「……行くぞ!」

「おおおおおおおおああああああ!!」

拳と拳がぶつかり合う。そして――

——切島君は前向きに倒れ、俺が勝利した。

「……やっぱ、勝て…ねえか……！ その余裕を、崩すことさえ……出来なかつた……！」

「そんな事は無いぞ。良いタフネスだった」

「次は、勝つ……ぜ！」

仰向けになって、切島君は拳をグツと空につき出した。俺はその拳に軽く拳をぶつけ、二人で笑い合う。

こうして俺は新しい友だちを得たのだった。

## No. 16 VS Bチームその2 作戦

「ふう」

あと四人か。何人かは他の奴が対処してるだろうから、俺が今対峙してる二人が最後の敵になりそうだな。

もしかしたら俺以外全滅なんて事態になるかもしれないが、ぶっちゃけまだ体力はある。

だから……

「全力で行かせてもらおうぞ、出久！」

「望む……ところっ！」

敵本拠地のビルは目前だ。俺がなるべく敵を引き付け、疲労させてから本隊が強行突破の予定だったが、何時まで経っても来る気配なし。俺が隠れていることが何故かバレてるみたいだったし、逃げててもあまり意味がなさそうだったんで、今こうして面を合わせてるわけだ。

そうこう言ってる内に、出久は俺の目の前まで迫っていた。

ザ・ワールド！ 生まれい時よツ！

「……………うおっ!？」

ここらへんの地面、何でこんなに柔らかいんだ……………？

危うく転けるところだったぞ。まあ誰も見てないから良いけど！

常人なら、ここで出久を攻撃するだろう。だが、俺は違う。敢えて無視するのさッ！  
無理に戦う必要は無し。核さえ確保出来たらこの訓練は終了する。

先程の発言は謂わばフェイク！

戦うぞ！ と言つて相手に気を向けさせれば、目の前の敵が消えた時に一瞬戸惑う筈だ。

よし。歩きにくくて結構時間を食われたが、もうそろそろビルにたどり着く。

……………つと、思っていた以上に時間がかかってたみたいだな。

時は動き出す！

「ん?」

なんか、足を掴まれたような……………

「かかったぞ緑谷！」

「!」

嘘だろおい!?

あのタコ野郎の手が地面から何十、いや何百本と生えてやがる!?

やけに柔らかい土だと思ったら、そういうことかよ！

鼠取り、と言うよりかはゴキブリホイホイみたいな感じで、ここらの地面全部にあのタコの増える腕を埋めてやがったのか！

恐らくだが、俺の足が地面に触れた瞬間、手が飛び出して足を掴むようにしてやがった……！

うおっ！

今度は突風が！

このパワーは出久だな！

「予想通りだよ、定くん。昔と変わらないね。君は嘘をつく時、一瞬瞳を僕から見て左に動かすんだ。それを見て、障子君に合図を送った。今から定くんが瞬間移動するから地面についた足をつかんでほしいと言う合図を、君に言葉で応えるという形でね。もし君が嘘をついてないようだったら、僕は何も喋らない。こうすることで相手にバレる事無くサインを送れるんだよ。さらに言えば君は予想外の事態に陥った時、データが殆ど無いから必ずとは言えないけど、顎を引いて腕を少し広げる。その間、君は硬直する。攻めるべきはその硬直状態の時がベストなんだろうけど、敢えて攻めない。確実に勝てる一手を打つためにね」

殆ど頭に入ってこなかった。だが、二つだけ分かった事がある。

出久ヤベエ。俺の状況もヤベエ。

この二つだ。

「その一手こそ、君の恐怖のサインを浮き彫りにしてくれる……！」

そう言つて、出久は人差し指を空に向ける。そしてゆっくりと俺の足下の陰が広がつていく。

空には、ビルがあつた。

正確には、ビルの屋上が。

「んなッ!？」

「訓練が始まつてすぐに、芦戸さんの酸で壁を溶かして、障子君や次郎さんが切り離して、最後に麗日さんが浮かしてくれたんだ。ちなみに、本来は切島君がAチームの誰かを足止めする予定だったんだけど、作業が思いの外早く終わったから芦戸さんと耳郎さんに攻めに行つてもらおうとしたんだ。運悪く定くんに当たつちやつたみたいだけだね」

これは……！

行ける！

「ザ・ワールド！」

「ッ！」

時よ止まれ！

ギリギリ間に合った。まず腕はがしーの。次にビルの屋上ボコボコにしーの。出久にテープはりーの。決めポーズとりーの。

時間停止、解除!!

「しまっ……あぐう!?!」

「緑谷……!」

フッ!

出久よ、ペラペラと計画を喋って結局油断してやられる敵キャラ役をありがとう！  
ここからは、俺の時間だ！  
世界



「いやあでも、彼の個性にはこの僕もビックリだね！」

やけにキラキラした青年、青山 優雅が一人で喋っている。少し離れた所にいるのは、飯田、砂糖、峰田の三人。計四人が、ヒーローチームの本部（と言う設定の建物）で待機している。機動力に長ける尾白と瀬呂は第二陣として神田の後を追っていた。

今回の訓練のルールの一つに、敵にヒーローチームの本部を選挙されてはならない、と言うものがある。

よって、ヒーローチームは二班に別れなくてはならない。

ヒーローチームの作戦はこうだ。

始めに、戦闘力の高い神田が敵チームに叩き込み。

次に、数を減らした、又は疲弊した敵チームを尾白と瀬呂が追い打ち。

それでもし敵チームが生き残った場合は、飯田と峰田で更に追い打ち。

機動力が高い個性ばかりなのは、もし追い詰められた際にすぐに離脱出来るようになるためだ。

もしここで敗れても、第二第三の仲間がいると言う安心感、体力回復ができる時間の確保等、利点は多い。

この作戦、名付けて『三段撃ち作戦』（発案：飯田／命名：尾白）！



勝った！

とはならない。

この作戦の穴、それは、時が経つほど守りが手薄になると言うこと。この三段撃ち作戦は、防衛にこそその本領が発揮される。

今回の訓練には些か頼りない戦法だが、そんなことは飯田も承知の上。

この作戦を選んだ理由、それはひとえに、体力テスト第二位の神田の存在であつた。彼の実力は折り紙つき。飯田の主観でだが、実力に関して言えば、一位の八百万をも上回るだろう。そう判断した飯田は、防衛向きのこの作戦を、一転して攻略特化の作戦として採用した。

結果は上々。瀬呂の無線により、神田が既に三人もの敵チームを捕縛したとの情報があつた。

『あいつマジヤベエ！ 味方で良かったああ！』

とは、報告者の弁である。こう見えて、神田はマジでヤベエのだ。

この時飯田は、油断は禁物だと自らを戒めていた。だが、コンピューターのように彼も人間。心の奥深くで、彼はもう大丈夫だろうと、高をくくっていたのだ。

それが間違いだつたと飯田および、だらけきつた他のメンバーが気付くのは、もうすぐの話である。